The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	薬師寺知曨 : 別府地獄めぐりと朝鮮語をつなぐ人
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2011, 37, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24678
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

薬師寺知曨－別府地獄めぐりと朝鮮語をつなぐ人[1]

植　田　晃　次

본 논문은 메이지（明治）초기 조선반도에서 약 20년 동안 신문기자와 ‘일어학교’ 교장 등으로 활동을 하다가 일본으로 돌아와서 벳푸（別府）의 초기 관광산업 발전에 기여한 藥師寺知曨(야쿠시지 지로 혹은 도모히데)의 생애에 대한 연구이다.

キーワード：薬師寺知曨,『韓語研究法』, 地獄めぐり

１．はじめに

本論文は，明治初期に宇和島に生れ，朝鮮半島で約20年間，ジャーナリスト・教育者等の多彩な活動を行った後，別府において当時勃興しつつあった観光業の発展に大きく寄与した薬師寺知曨の生涯について明らかにし，朝鮮語教育史の視点からある人物を捉える際のアプローチについて再考するものである。

薬師寺の経歴については，簡略にしか知られておらず，その生涯を通じた事実関係を明らかにすることを第1の目的とする。

薬師寺はジャーナリスト，日語学校である韓南学堂の運営者，朝鮮語文法書の著者，観光プロデューサーなど多様な顔を持つ。従来は，彼が活動した時期に従い，メディア論，朝鮮語学，朝鮮教育史，郷土史などそれぞれの分野で彼の生涯の一部が切り取られて取り上げられてきた。

これまで，朝鮮語教育史では，学習書を見るにあたって，例えば梶井（1980;1984改訂:190-213）のように，主としてその著書の形態や内容に，より多くの関心が払われ，その著者である人物と朝鮮語との関わり，さらにはその人物の生涯の中での朝鮮語との関わりという視点からは考察されてこなかった。しかし，ある著書を分析する際に、その著者について，考察することは不可欠である。さらにはその人物のある時期の活動について理解するには，その時期を見るのみでは不十分であり，その生涯の一部として捉える視点が必要である。

そのため本論文では，朝鮮語教育史研究のひとつの方法として，薬師寺知曨を取り上げ，彼の経歴について生涯を通して描き出すことにより，人物を包括的に捉えるアプローチ方法を試みることを第2の目的とする。

1）　本論文は2008～2010年度科学研究費補助金基盤研究（B）「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」（課題番号：20320081），研究代表者：植田晃次）による成果の一部である。引用文は旧漢字を新字に改めた他は原文のままである。ルビは省略した場合がある。なお，引用の「、」は「,」に統一して改めない。

先行研究では，まず，人物史の類で薬師寺の経歴について，比較的詳細に記述したものとして，中田（1905），網中（1935），中西（1936）の3つがある。中田（1905）では誕生から渡航し，韓南学堂で活動するまでが述べられている。中西（1936）では，韓南学堂以降の活動についても述べられている。また，網中（1935）は誕生から還暦を越えるまでを比較的詳細に記述している。それぞれ写真も収められており，容貌も確認できる[2]。

如上の人物史の類以外のものとして，書誌学の観点から，薬師寺の経歴について，「著者は宇和島出身、末広鉄腸の門に学び、明治二十八年仁川に航し、「朝鮮新報」の記者として青山好恵をたすけ、健筆をふるった。後感ずるところあり「朝鮮開導論」一篇を公にし、朝鮮人教育に身をささげ、単身江鏡に入り独力で韓南学堂を起し、その学塾を主宰した。」と述べられている[3]。

朝鮮教育史では，とくに稲葉（1985）で韓南学堂時代の状況が詳細に述べられている。このほか植民地史で高崎（2002:78）等や，社会史で上島（1988:503-504），東京都江戸東京博物館編集（2005:154）等でもそれぞれの側面から断片的に言及されている。

上掲の３つの人物史の類を除き，他の諸分野の先行研究でも，経歴の記述はおおむねこの程度の簡略な範囲に留まっている。

また，郷土史では小説仕立ての物も含め，三重野（2004）・村上（1984）・村上（1998）等の如く，亀の井ホテル創業者の油屋熊八に関する著作で薬師寺の名に触れられるが，「読み物としての完成度を高めるために一部フィクションが混ざっているようである」[4]という指摘があるように注意を要する。また，薬師寺自身を取り上げた新聞連載や広報誌記事もある[5]。

本論に入る前に，薬師寺の名前について述べる。表記については，「知曨」・「知朧」・「知隴」の３種類が見られる。その読みも「ちろう」・「ともひで」が見られる。NACSIS Webcatの著者標目では「チロウ」となっている[6]。「ともひで」という振り仮名を付すものとしては，佐賀（1984）の（57）・企画集団ハヌマン（2002:31）・三重野（2004:49）・東京都江戸東京博物館 編集（2005:154）があるが，それぞれ典拠は示されていない。なお，表記はそれぞれ順に「知朧」・「知朧」・「知隴」・「知曨」とされている。

本論文では，後掲するすべての自著で「知曨」という表記が用いられていることから，表記についてはこれを採る。読みについては，現段階では断定できない。

通説では，不老町に住んだことから不老町人という筆名を用い，後に不老暢人と改めたとさ

2） 村上（1998:51），企画集団ハヌマン（2002）等にも写真がある。特に後者には，薬師寺と示されていないが，本人と思われる写真が以下の箇所に掲載されている。28-29頁「亀の井自動車の車庫前に勢揃いした大型バス群。」（左１が薬師寺カ），30頁「昭和6年1月1日。少女車掌とその指導者薬師寺知朧［ママ］氏。」（後列右1），33頁「ラジオ放送中の少女車掌。向かって左が名文で知られた名勝案内の作者でありまた，少女車掌を教育した指導者でもあった薬師寺知朧［ママ］氏。」

3） 桜井（1974:93）。桜井（1979:520）にもほぼ同じ記述がある。ともに名は知朧とされている。また，この記述は内容の重なり具合から見て，中田（1905）を参照したものと見られる。

4） 織田（2009:26）

5） ［今日新聞］（2008）・別府市役所（1999）・佐賀（1984）等

6） 2010年9月21日最終接続

れる（上島1988，村上1996）。筆名の変更時期についてはこれまで言及されていなかったが，著作を見るところ，1931～1932年頃に「町」を「暢」に改めている（後掲表2参照）。

しかし住所を由来とするこの通説には疑問が生ずる。なぜなら，不老町人または不老暢人という筆名は1928（昭和3）年7月10日発行の『名勝解説地獄めぐり（別府案内）』で既に使用されているのに，著書の奥付を見る限り，住所の変遷は表1の通りであるからである。

住所	当該年月日
大字別府2421番地（楠町10丁目）	1928（昭和3）年7月10日・8月10日
流川通6丁目	1929（昭和4）年7月5日・7月25日・1930（昭和5）年1月31日
大字別府2421（楠町10丁目）	1931（昭和6）年1月10日
楠湯通10丁目	1932（昭和7）年3月7日
大字別府2421（楠湯通10丁目）	1934（昭和9）年6月30日
不老泉通7丁目	1935（昭和10）年5月10日
不老泉通7丁目2166番地	1936（昭和11）年1月7日
大字別府2166-1	1936（昭和11）年1月15日・11月30日・12月10日・1940（昭和15）年8月25日

表1　薬師寺知曨の住所[7]

ここから分かるのは，薬師寺（1933;1934[2]）の1934年6月30日までは，住所は不老町ではないことである。実際に不老町（ただし，不老泉通りとなっている。）の住所が確認できるのは，薬師寺（初版刊年不記載;1935[6]）の1935年5月10日以降である。

別府に引揚げた1927（昭和2）年から，楠町の住所が確認される1928（昭和3）年7月10日までの間に不老町に住んでいた可能性も全く排除できないが，その時期の住所が確認できない現段階では，疑問を提起しておく。

この不老町というのは，「この町筋は不老町、「不老泉」から「田の湯」まで、続く町並家並は、数百年の昔より、絶えず湧きでる温泉の、あつき恵みに恵まれて、開けし処と申します。」[8]という名勝解説からわかるように，現存する市営温泉・不老泉のある不老泉通りの周辺を指す。大字別府2166-1もしくは不老泉通7丁目2166番地というのは現在の亀の井ホテルの正面の裏手にあたり，空地になっている。大字別府2421番地は楠湯通りのやや山寄りにあたり，複数の住宅・駐車場となっている[9]。

また，仁川での記者時代には，郷里愛媛県の『海南新聞』に寄せた記事に薬師寺南陽生、もしくは単に南陽生という筆名も用いている[10]。

7）　後掲表2の各冊子奥付より作成。
8）　薬師寺（初版刊年不記載;1935[6]:3）。引用する薬師寺の著作については，論文文末の参考文献の他，表2も参照のこと。同表の表示欄の刊年により，薬師寺（表示欄の刊年）等と示す。
9）　2010年9月16日に実地調査を行った。
10）　例えば，「半島時事録」『海南新聞』1896年2月9日付3面、同年3月18日付3面

２．誕生から渡韓まで：宇和島から京都へ

2・3章では，以下特に注記の無い限り，網中（1935）の記述に依りながら，その他の資料により判明した事項を補いつつ，薬師寺の経歴について述べる。

1872（明治5）年10月4日[11], 愛媛県（伊予国）宇和島市元結掛町の代々の宇和島藩士の家―後に自身は「貧乏士族の家庭」[12]と述べている―に生まれる。幼少時から武士道的薫陶を受け, 愛媛県立第三中学校より京都の平安義校（もしくは平安義黌）に転じ，同校を卒業するとともに「独学自習、只管学問道に精進」する。故末広鉄腸の門人とされる[13]。なお，末広鉄腸とは同郷である。

また，日本の労働運動・組合運動・生協運動創始者の高野房太郎の1897（明治30）年の日記[14]の巻末の住所録に記載された，横浜在住の10人の中に薬師寺の名が見えることから，高野の横浜商法学校速成科[15]の同期生の可能性が高いという指摘がある[16]。この住所録の薬師寺についての記述は以下の通りである[17]。原文は縦書である。前後の各1名も併記する。

横浜太田英町二丁目十四番地	河合順三郎
仝	薬師寺知曨
朝鮮仁川朝鮮新報社	村松忠雄

二村（2005: 注1）は,「仝」は前行を承けると見て，薬師寺が横浜在住と考えているが，後述のように, この日記の2年前である1895（明治28）年に薬師寺はすでに渡韓している。渡韓後，一時横浜に在住していたのか，あるいはこの箇所については，何らかの理由で逆順となっており，薬師寺の仁川での職場である後列の「朝鮮仁川朝鮮新報社」を受けているのか判断できない。横浜商法学校の速成科に在籍していたかどうかは解明すべき課題として残る。なお，村松忠雄もまた末広鉄腸同様に薬師寺と同郷の宇和島出身で，同じ年（1895年）に朝鮮に渡った朝鮮新報記者であり，大院君暗殺計画の書状を郷里の友人に出して物議を醸した人物である。その実兄は『朝鮮新報』の青山好恵である[18]。

薬師寺自身も，1895（明治28）年12月16日付の西園寺大臣から京城内田領事宛の電信案・電

11） 中田（1905:170）では1月とされている。
12） 不老暢人（1936:6）
13） 中田（1905:170）
14） 法政大学大原社会問題研究所大原デジタルアーカイブス「『高野房太郎日記』明治30（1897）年」http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/arc/fusataro.pdf，2010年9月23日最終接続
15） Y校百年史編集委員会 編（1982:30）には「（前略）同月二五日速成修学のための夜学部を開設し一四人の生徒が入学した。」とある。
16） 二村（2005: 注1）。ただし，二村（2008:34）では，具体的な姓名は消え,「房太郎は横浜商法学校で多くの友人を得ました。毎日会っていたのは速成科の生徒ですが，残念ながら同期生についてはまったく分かっていません。」とのみ記されている。
17） 囲み文字は推定
18） 1895（明治28）年11月7日付の愛媛県知事・小牧昌業から警保局長・小野田元熙宛の甲秘第429号。「在韓国村松忠雄外一名ヨリ在本邦福井友一宛同国大院君暗殺計画ニ関スル書翰発送一件」外務省外交史料館蔵，国立公文書館アジア歴史資料センターウェブサイト，2010年10月18日最終接続，レファレンスコード：B03030221000に収録

送第916号に「其地在留ノ村松忠雄薬師寺チロウ［ママ］外一名」が大院君暗殺を窺うも，閔妃殺害事件以降取締りが厳しく，退韓を命じられる虞があるという書面を宇和島の知己に送ったので，調査の上，形跡があれば退韓を命じるようにという記述がある。しかし，最終的には1896（明治29）年3月23日付の在仁川領事館事務代理領事官補・萩原守一から外務次官・原敬宛の「村松忠雄ニ係ハル密偵ニ関スル件会報」で「此ノ件ニ関係ナキ」ものと記されたように無関係とされる[19]。

なお，薬師寺はキリスト教徒であったという[20]。

３．朝鮮での薬師寺知曨

1895（明治28）年，薬師寺は朝鮮半島に渡る。そして，仁川の『朝鮮新聞』に入社し[21]，主筆もしくは社会部副部長を務め[22]，「堂々の筆陣を張つて半島操觚界に万丈の気を吐き一躍同紙の声価を高からしめた」[23]という。同紙は青山好恵が再刊した新聞であるが，彼は1896（明治29）年11月23日に郷里の宇和島で病没する[24]。なお，ここでは，青山と薬師寺は同郷の同年生まれであることを指摘しておく。その後，1895（明治28）年の渡韓から在勤4年で「操觚界」から去る。これについては，部下の「剛直な男」の筆禍事件の責任をとったとされ，「御用記者にはなりたくない。骨のあるやつはまだまだいるもんです」[25]ということばが薬師寺の発言として付記されているが経緯の詳細は不明である。

ジャーナリズム界から身を引いた薬師寺は，朝鮮開導論一篇を発表し[26]，忠清南道江景に移住し[27]東亜同文会の支持を得て[28]，1898（明治31）年10月7日，同地で個人経営の「日語学校」である韓南学堂を創設し自ら校長として経営・教育に当る。同学堂は「邱の上に在て、其処から眺れば、前は四里四方の稲田で、殆ど海の様に思はれる」[29]という環境に位置していた。また，薬師寺の妻も教員として教育に当たっていた。

1905（明治38）年12月27日には，分校である魯城論山忠仁学校が開設されたが，1906（明治39）年2月，韓国統監府が開設されると，東亜同文会が経営・補助する日語学校は統監府の管

19）1895（明治28）年12月16日付・1896（明治29）年3月23日付の文書とも，前掲「在韓国村松忠雄外一名ヨリ在本邦福井友一宛同国大院君暗殺計画ニ関スル書翰発送一件」に収録
20）稲葉（1985:80,95）
21）하동호（1977）では1897（明治30）年からとしている。
22）中西（1936）・上島（1988）・村上（1984）・村上（1998）・東京都江戸東京博物館 編集（2005）。1896（明治29）年3月23日付の在仁川領事館事務代理領事官補・萩原守一から外務次官・原敬宛の「村松忠雄ニ係ハル密偵ニ関スル件会報」では，「朝鮮新報会計掛」とある。前掲「在韓国村松忠雄外一名ヨリ在本邦福井友一宛同国大院君暗殺計画ニ関スル書翰発送一件」に収録
23）網中（1935:64）
24）桜井（1964:182）
25）佐賀（1984:58回）
26）中田（1905）。また，ここでは「君が韓人教育論に曰く、予が理想は一の大なる日本宗を彼等社会に伝道し、以て彼等の社会的中堅を衝くに在り」とされる。
27）江景時代の活動については，稲葉（1985:83-85,88）・東亜文化研究所（1988:99）に依った箇所がある。
28）東亜文化研究所（1988:100）によれば，発足当初の同会の活動資金は外務省機密費の4万円がすべてであったという。また、韓南学堂について「日本官弁商士の義捐金が数千元を下らないが尚募集中である」と報じられている（「捐金奨学不是為人便是為己」『皇城新聞』1900年3月10日付2面，景仁文化社発行影印本（1984年3版）に依った。）。
29）中井（1915:59）

理に一任され，1906（明治39）年4月1日，東亜同文会は直接経営の日語学校から手を引き，補助対象であった韓南学堂等は統監府が引き継いだ。韓南学堂は1907（明治40）年2月までは存続していたとされるが，その後は不明であるという。1908（明治41）年3月22日には，恩津郡公立江鏡普通学校開校式兼落成式に落成式委員・韓南学堂長として薬師寺が出席し，祝辞を述べており，「開校式兼落成式と機械購買寄附金」として、2円を寄せている[30]。

韓南学堂を廃止し在留日本人会長（江景日本人会長ともあり）に挙げられ，傍ら朝日・中央・海南新聞に健筆を揮ったという[31]。また，1904（明治37）年12月2日から一進会員が全州に「入来」した際の在京城領事の三増久米吉から小村寿太郎外務大臣宛の公信第26号附属「全州府一進会員動静視察復命」に，「当地不穏ノ事アリト聞キ当地在留本邦知人ヲ保護」するために，「猟銃刀剣ヲ携ヒ一行中ニ加リ来リシモノ」として「江景在留ノ本邦人薬師寺知曨其他数人」の名が挙げられている[32]。

江景在住中には，『文法註釈韓語研究法』を発行している。その奥付では，住所が「韓国江景山手町一番地」となっており，発行の1909（明治42）年10月15日段階では，江景に在住していたが，後掲の『満韓之実業』54の記事からは，1910（明治43）年5月頃には，江景日本人会長の肩書で群山に帰着している。このことからこの頃には既に群山に転じたばかりか，江景と群山を行き来していたのではないかと推測される。

『文法註釈韓語研究法』は上述のように1909（明治42 ）年10月15日発行で，半仙書屋蔵版，発売元は盛文堂（京城大漢門前），梶商店（忠清南道江景中）が南韓大売捌所である。定価は1.50円。管見の限りでは，増刷・重版などは確認できない。

「自序」では刊行の動機を，「邦語普及の必要なるは言ふを俟たざるところなりと雖も、韓語を蔑視して其研究を勉めざるより来る各人直接の不利不便は、実に見るに忍びざるものあり。」と「白人伝道者」が韓語を駆使していることを引き合いに説いている。また，「（前略）余輩は常に唱道して、在韓の邦人、特に日夕韓国の官民に接触すべき業務に在る者は、尠なくとも韓語の一斑を解して日常業務の利便に資し、更に其研究に勉めて人情の機微に通じ、以て公私百般の経営に貢献するところ無かるべからずと。」と述べている。

執筆に関しては，「昨冬以来、非常の熱心と多大の奮励とを以て（略）著述に従事し、日を閲すること二十余旬にして漸く其稿を了へ」たとされる[33]。

薬師寺は自らについて，「自序」・「例言」でそれぞれ「余は元来言語の学を修めたる者に非ず、又た韓語を専攻したる者にも非ず、故に韓語に就きて識るところ甚だ浅薄にして、韓国研究の

30）「江校落成盛況」，「公立江鏡普通学校開校式兼落成式と機会購買寄附金」『皇城新聞』1908年4月2日付1・3面（景仁文化社発行影印本（1984年3版）に依った。）。

31）少なくとも郷里愛媛の『海南新聞』には，韓南学堂を始める以前にも，在京城（もしくは在仁川・在朝鮮・在韓特置員）として「朝鮮特報」（1895年12月12日付2面・1896年1月7日付1面・同8日付2面等）・「半島時事録」（1896年3月18日付3面等）、「韓山時事」（1898年1月6日付2面等）の表題で朝鮮のニュースを寄稿する等している。日によっては，薬師寺による記事にほぼ1面分が割かれていることもある。

32）「3 明治38年1月10日から明治42年10月19日」外務省外交史料館蔵，国立公文書館アジア歴史資料センターウェブサイト，2010年10月28日最終接続，レファレンスコード：Ｂ03050325700に収録

33）天野喜之助「韓語研究法に序す」。なお，「昨冬」は1908年冬のこと。

序次、唯だ僅かに其一斑を知り得たりと言ふに過ぎず。」,「韓語専攻家ならざる余」等と述べているように，少なくとも教育システムの中で朝鮮語を習得したのではないが，どこでどのように朝鮮語を学んだのかは不明である。

とはいえ,「由来韓語を学ぶの書乏しからずと雖も、文法を講究し、秩序的に之が性質と用法とを解釈せる本書の如きは、蓋し其類稀なり。」（国分象太郎「韓語研究法序」）と評価されているように，体系的な記述を試みた。実際，当初は本書に実用会話も採録しようとしたが，紙幅の都合で省いたとするものの,「本書が文法を説くに偏して会話を叙するに乏しき観あるは既刊韓語学書の欠陥を補はんと欲するの意あるに依るものなり。」という執筆方針が「例言」に示されている。

また，述語・体裁は，大槻文彦『日本文典』を，音韻の規則は，周時経『韓語文典音学』を参照し,「例語」は前間恭作・藤波義貫共訂『校訂交隣須知』，国分国夫編纂・国分象太郎増補『日韓通話』，安泳中『韓語』等から少なからず引用したことが明記されている。

薬師寺の著した朝鮮語関係の著書としては,『文法註釈韓語研究法』の「例言」で「（略）会話は別に一巻として本書の続編と為し，機を得て上梓せんとの希望を有し目下其準備中に在り。」とし，巻末には「近刊予告」として『日韓会話精義』（発売元:盛文堂，南韓大売捌所:梶商店）という書籍が挙げられているが，管見の限りでは実物は確認できない。「『韓語研究法』其の他数種の著述を完成」[34]等とあることから，刊行された，あるいは脱稿したが刊行には至らなかった可能性がある。

韓南学堂から手を引き，群山に移った薬師寺は，雑誌『実業之朝鮮』を主宰する傍ら，群山印刷株式会社専務取締役として執筆活動を行う一方「実業界に雄飛して令名嘖々」[35]であった。

1910（明治43）年には，群山日報社長・満韓実業協会会友の小川雄三が引率する群山日報主催の日本観光団が,「木浦釜山を至て渡日各地視察の上昨月下旬帰群」した際，江景日本人会長であった薬師寺も群山貿易商・同会特別会員の岡部恒祐とともに,「一行に加わり観光の上帰群」[36]した。

在韓時代か別府時代は不詳であるが，大日本雄弁会講談社の懸賞に小説「むくげ物語り」が当選し，賞金1000円を獲得したことや,「日本と新羅の関係」という「大論文」を発表したというが詳細は分からない。

この時期，すなわち韓南学堂から手を引き，別府に引き上げるまでの約20年の活動の詳細は上述の「実業界に雄飛」した具体的内容とともに明らかでない。

４．別府での薬師寺知曨

1927（昭和2）年30余年に渡る朝鮮での生活を終えて別府に引揚げる。その経緯は不老暢人

34）網中（1935:65）
35）網中（1935:65-66）
36）『満韓之実業』54，満韓実業協会，1910（明治43）年6月1日発行，86頁,「会報」欄「会員之来往」

（1936）[37]に詳しい。これによれば，まず，「一生に一度は、別府へ入湯に往つて見たいものですナ。」・「何処にでもお湯が湧き、海辺から湯気が立つてゐるさうですナ。」といった話を少年時代に周囲で聞き，「脳裏に刻み附けられたまだ見ぬ別府」像があったという。

その後，薬師寺が「フトした拍子から」別府を初訪問することになったのは1900（明治33）年である。この「フトした拍子」が何を指すのかは不明だが，その際，別府を見て回り印象的だったことは，「親切なサービス」・「費用の意外に要らなかった事」と述べている。

当時は江景にいたであろう薬師寺自身も言うように郷里の宇和島は別府とは「一葦［ママ］帯水」であり，行き来も多かったようである。

薬師寺がなぜ「令名嘖々」であった朝鮮を離れたのか，また郷里の宇和島や他の大都市にではなく，別府に転じたのかはよくわからない。ひとつ推測するなら，後にその部下として働くことになる油屋熊八とは同郷人であり，また宇和島とは海を隔てた対岸で行き来も多い別府にはいうなれば宇和島コネクションとでも呼べる人脈が存在していたと思われ，何らかのつてを頼って移住したのであろうと考えられる。

いずれにせよ，1927（昭和2）年，別府に移住してからの薬師寺は，どうやら「“物書き”の真似ごと」をする「作家志望の男」として[38]，本意ならぬ日々を送っていたようである。

その頃，当時の観光業の発達にともない，亀の井自動車では1927（昭和2）年12月1日[39]に，地獄巡りの少女車掌を導入することになる。その解説について妻の妹婿[40]であり，別府温泉開発の中心人物である油屋熊八から依頼され試作してみたところ好評となり，同社に招じられ，亀の井自動車株式会社の創立に参画して常務取締役に就任した。それからは，少女車掌による七五調の地獄巡り遊覧自動車の解説台本を創作し，少女車掌の教育担当者として活躍することになる。また，阿蘇登山・鹿児島池田湖巡りの遊覧バスの解説や「別府小唄」・「地獄めぐりの唄」の作詞をはじめとした創作も手がける。この頃のエネルギッシュな活動の様子は，「亀の井自動車が幾多の難関を切り抜け経営の危機を脱して泉都の業界に輝かしい金字塔を築き上げたその努力は、換言すれば経営者薬師寺君の奮闘史である。」[41]という記述からもうかがえる。

また，別府に転じた初期である1929（昭和4）年には，日本ホテル協会のアメリカへの視察旅行が行われた際，油屋熊八ら協会の幹部とともに，ハワイを経由し，サンフランシスコ，ロサンゼルス，ナイアガラの滝，ニューヨーク，グランドキャニオン，ヨセミテ国立公園などを3ヶ月間視察している。渡米に関する直接の記録は見出せないが，薬師寺と思われる人物の写った写真（2列目右2番目）が残っていることから[42]，薬師寺には少なくともこの1回はアメリカ経験

37）［今日新聞］（2008）の連載にも紹介されている。
38）村上（1984:195-196）
39）通常翌年の1928（昭和3）年開始とされるが，薬師寺（1928;1931[3]）の「我国最始の試み」では1927（昭和2）年12月開始とされている。
40）油屋熊八は文久3年生まれで薬師寺より年長であるので，姉婿の誤りの可能性がある。また，佐賀（1984）では，「熊八の妻ユキの姉の娘、つまり熊八にはめいになる女性」（第57回）とされている。いずれにしても油屋熊八とは姻戚となる。
41）網中（1935:64）
42）東京都江戸東京博物館 編集（2005:47）

があったと判断してほぼ間違いない。薬師寺知曨カ（1935）によれば，「米国太平洋岸ホテル協会の招待を受け、日本ホテル協会を代表して」渡航したものであるという。日本・朝鮮・アメリカを知る人物であったということになり，薬師寺の人生にはその経験が反映されているだろう。

1935（昭和10）年3月24日，油屋熊八が死去した。日付から見て4月6日に行われた葬儀で配布されたと見られる「油屋熊八翁略歴」（同日付）が現存しているが，各段落の第１字目をゴシックで強調している形式は，薬師寺（1928;1931[3]）の「此小冊子の生れたわけ（初版の序）」・「再版と原文訂正」にも用いられており，薬師寺によるものと考えてよかろう[43]。同年秋に「油屋熊八翁銅像建設計画」が起った際には，発起人に名を連ねている[44]。

家庭生活では，旧宇和島藩主伊達宗城側用人・戸田義成の娘である夫人・喜久（喜久子）との間に令息・至（大阪工大卒，アメリカ留学を経て造船技師）をもうけている。

最晩年については，没年を含め不詳である。

５．地獄めぐりと七五調の発案

薬師寺が創作した遊覧自動車の解説台本の解説の文言は亀の井ホテルとゆかりのあった菊地寛や久米正雄に添削を依頼した際にも僅かな補修がなされたのみであったという伝説的逸話が繰り返して語られている。

この解説はしばしば「七五調」として言及されるが，当初はそうではなかった。たとえば地獄巡りの初版冒頭は「此処は別府市の東南を境する、脇浜温泉の海岸通り、右手は瀬戸内海に続く、名だゝる別府湾でございます。」と七五調にはなっていない[45]。

薬師寺（1930）は3版発行にあたっての「作者のことば」で，「原文は解説実施の始めに当り、普通の文章体又は口語体を以てしたが、言ひ廻はしに労多くして解説者の疲れを増すが故に、曩の日全部を韻文めきたる七五調に改訂し、尚ほ言ひ易く判り易く、成るべく簡潔な辞句たらしめんとして、之に幾修正を加へたのである。」と明かしている。七五調は，昭和3年6月以来「謂はゆる「リズミカル」解説」，あるいは「旋律体（メロヂカル）解説」として採用したものである[46]。

この解説は，「本廻り」用とその逆順の「逆廻り」用の外，コースの延長・天候の変化などにより臨機応変に対応できるよう細かく策定されている。また，「一句十二音につき三秒五分の一の割を以て解説時間を計り以て章節の長短と句数の多少を定めた」という（薬師寺1930）。内容はしばしば改訂され，その様子は東京都江戸東京博物館 編集（2005:154）に示された，表紙に「薬師寺用」と書かれた『地獄めぐり』の校正の様子の写真から看て取れる。

43）上島（1988:504）では，特に根拠は示していないが，「故油屋熊八翁略歴の執筆」を薬師寺によるものとしている。
44）村上（1998:166）
45）薬師寺（1928a）
46）薬師寺（1936a）「作者の言葉」，薬師寺（1935;1940[3]）「作者の言葉」

また，『地獄めぐり三版』「再版と原文改訂」には「始めて遊覧車上の名勝解説を実施するに至りたるは、運転課の長老堀君の発意に因りたるもの、解説原文中に点綴せる史的事項に就ては、殆ど宇都宮山香老の高教に俟たざるはない。茲に此の旨を特記し置く。」[47]とあり，熊八と薬師寺のみの発案・作成ではないことが明記されている。

６．解説冊子の作成・販売

この解説は好評を博し，解説原稿を欲しがる遊覧客が「日々数名、時には十数名、中には人を特派し或は文書を以て、遠地からも」続出し，販売用の冊子が作られることになった[48]。刊行から1年余で10,000部が売れ，再版された[49]。

亀の井自動車の事業拡大に伴い，耶馬渓巡りが1927（昭和2）年夏から開始されるなど周辺地域でも遊覧バス事業が行われるようになる[50]。それとともに同様の解説冊子作成の試みは大阿蘇登山（1932年），池田湖巡り前編（1933年），耶馬渓巡り・池田湖巡り後編（共に1935年），由布院遊覧（1936年）と続いて行われる。このうち，それぞれ大阿蘇登山，池田湖巡りは大阿蘇観光道（株），猪俣自動車（株）の依頼によるものである[51]。

この間，薬師寺が執筆した名勝解説類には，車掌教育用の「解説教科書」の他，販売用のものもあった。現存が確認できたものは，表2の通りである。

表示	奥付の発行日	書名	発行所
		備考	
1928a	1928（昭和3）年7月10日	**名勝解説 地獄めぐり（別府案内）**	亀の井自動車株式会社
		大（№00003632080）	
1928b	1928（昭和3）年8月10日	**由布院仙郷－山嶽・高原・盆地温泉の絶勝**	亀の井自動車株式会社
		大（№00009561572）	
1929a	1929（昭和4）年7月5日	**名勝解説原文（前編）**	亀の井自動車株式会社
		本編冒頭には「別府近郊名勝解説　前編」，表紙には「昭和四年三月改訂」とある。大（№00003818150）	
1929b	1929（昭和4）年7月25日	**名勝解説原文（後編）**	亀の井自動車株式会社
		本編冒頭には「別府近郊名勝解説　後編」，表紙には「昭和四年七月」とある。大（№00003818168）	
1930	1930（昭和5）年1月31日	**別府名勝解説原文（全）**	亀の井自動車株式会社
		表紙には「昭和五年一月 第三版」とある。大（№00003818176）	
1928;1930[2]	1930（昭和5）年8月20日再版	［参考］**名勝解説 地獄めぐり（別府案内）**	
		3版奥付による。	

47） 薬師寺（1928;1931[3]）
48） 薬師寺（1928a）「此の小冊子の生れたわけ（序文）」
49） 薬師寺（1928;1931[3]）「再版と原文改訂」
50） 薬師寺（1935;1940[3]）「作者の言葉」
51） 薬師寺（1936a）「作者の言葉」

1928; 1931[3]	1931（昭和6）年1月10日3版	**名勝解説 地獄めぐり（別府案内）**	亀の井自動車株式会社従業員共済会
		表紙には「改訂」「三版」とある。大（№00003632098）	
1932	1932（昭和7）年3月7日	**亀の井専用 名勝解説指針 解説教科書**	亀の井自動車株式会社
		表紙には「昭和七年三月 第四版」とある。大（№00003818135），別（№110729845，110730512）	
1933	1933（昭和8）年4月1日	［参考］**案内解説 大阿蘇登山**	
		再版奥付による。	
1933; 1934[2]	1934（昭和9）年6月30日再版	**案内解説 大阿蘇登山**	大阿蘇登山バス事務所
		発売元：大阿蘇登山バス坊中ガレージ，個人蔵	
1935a	1935（昭和10）年1月10日初版	［参考］**バス名勝解説原文 増補耶馬溪巡り解説 全（亀の井専用）**	
		3版奥付による。	
初版刊年不記載; 1935[6]	1935（昭和10）年5月10日6版	**地獄めぐり 遊覧バス 名勝解説指針（亀の井専用）（解説教科書）**	亀の井バス車掌会
		表紙には「昭和十年四月 改訂増補・第六版」とある。大（№00003818143），別（№110729852）	
1935b	1935（昭和10）年11月？日	**耶馬溪巡り解説 訂正・正誤・追加（車掌用）**	亀の井バス株式会社
		奥付なし。表紙には「昭和十年十一月」とある。著者名不記載。大（№00003676681）	
1936a	1936（昭和11）年1月7日	**遊覧バス名勝解説原文 由布院遊覧解説 全 亀の井専用**	亀の井バス車掌会
		別（№110730504）	
1936b	1936（昭和11）年1月15日	**遊覧バス名勝解説原文 由布院遊覧解説 下編 改訂・帰路の部**	亀の井バス車掌会
		大（№00003818218），別（№110746534）	
1935; 1936[2]	1936（昭和11）年2月20日再版	［参考］**バス名勝解説原文 増補耶馬溪巡り解説 全（亀の井専用）**	
		3版奥付による。	
初版刊年不記載; 1936[7]	1936（昭和11）年11月30日7版	**改訂七版 遊覧バス名勝解説原文 地獄巡り解説 全（亀の井バス車掌テキスト）**	亀の井遊覧バス販売部
		大（№00003818184），別（№110730520,110730538）	
1936c	1936（昭和11）年12月10日	**改訂再版 遊覧バス名勝解説原文 由布院めぐり解説 全（亀の井バス車掌テキスト）**	亀の井遊覧バス販売部
		大（№00003818200），別（№110730496）	
1935; 1940[3]	1940（昭和15）年8月25日3版	**バス名勝解説原文 増補耶馬溪巡り解説 全（亀の井専用）**	亀の井バス報国会
		表紙には「三版」とある。大（№00009363060）	
不記載	不記載。増補2版	**大阿蘇登山バス 車掌用解説原文 増補第二版**	記述なし。
		表紙には「非売品」とある。大（№00003818127）	
不明	不明	**由布院めぐり解説**	

		書名は簡易製本の背表紙のもの。冊子の4〜11頁と広告2頁分をザラ紙に各葉2頁ずつ貼付け簡易製本したもの（4･5頁貼付の余白に「昭和、一一、一二、一〇／薬師寺知曨／著／由布院めぐり解説」，広告貼付の余白に「昭三、八、一〇／由布院仙郷／（広告）」と書込あり。）。大（№00003818119）

表2　薬師寺知曨 編　名勝解説冊子一覧

＊「表示」欄はその刊年・版を示す。引用する薬師寺の著作については，これを用い，薬師寺（表示欄の刊年）等と示す。

＊現物は未見で奥付等で発行を確認したものについては,「書名」欄冒頭に［参考］と記し,「発行所」の欄は空白にした。

＊備考の「大」は大分県立図書館蔵,「別」は別府市立図書館蔵の略。

遊覧観光が好評となると「今日では君の創案を模倣して大橋バスもこれをやつてゐるが亀の井バス□（判読不明）独特味に追随し得べくもない」[52]というように模倣する大橋バスのような会社も現れた。森川芙蓉子（1933;1933[2]）といった版型や内容の極めて類似した解説冊子も作成・販売された。しかし結局，大橋バスは亀の井バスに買収されることになる[53]。

1928（昭和3）年10月に少女車掌として採用された村上あやめ氏は，薬師寺の指導ぶりについて，以下のように述懐している。

「夕方会社の事務所に帰って、薬師寺さんがいると、さぁ言ってみなさい、と、練習がはじまりました。薬師寺さんが指でトントンと机を叩きながら、指導するんです。リズムや、節回し、区切りなど、そして目線や動作まで厳しく教えられました。」[54]

さらに「解説のラヂオ放送」が行われた。1928（昭和3）年12月5日，熊本放送局から地獄巡り解説を全国放送し，遊覧解説の放送の嚆矢となった[55]。ラジオ放送の様子は「ラジオ放送中の少女車掌。向かって左が名文で知られた名勝案内の作者でありまた、少女車掌を教育した指導者でもあった薬師寺知朧［ママ］氏。」[56]と言う写真が残されていることから，薬師寺も放送に立ち会っていたことがわかる。

解説はラジオ放送されるに止まらず，複数のレコードが作成された。まず1932（昭和7）年3月，ポリドールで吹込み，その後1934（昭和9）年12月には，タイヘイレコードで吹込まれた。これらのレコードは,「タイヘー版」は別府市のみで年間50000枚売れたという[57]。

具体的なプレスの状況は,『地獄巡り解説　全　改訂七版』[58]の亀の井バス販売部の巻末広告から以下の通りと分かる。これによれば，地獄めぐりだけでも3種類のレコードが発売されて

52） 網中（1935:65）
53） 佐賀（1984，62〜64回）
54） 企画集団ハヌマン 制作（2002:26,31）
55） 薬師寺（1936b）「作者の言葉」
56） 企画集団ハヌマン 制作（2002:33）
57） 薬師寺（1936a）「作者の言葉」
58） 薬師寺（初版刊年不記載;1936[7]）

いたことになる[59]。

(1)「地獄めぐり解説」(解説：村上綾子，発売：ポリドール，1.00円，1枚物)

(2)「地獄めぐり解説」(解説:森山芙美子, 小唄:小浜登代子, タイヘー, 0.80円, 小唄入2枚組)

(3)「地獄めぐり解説」(解説:森山芙美子･八坂寿美子，小唄:生駒静子，テイチク，0.80円，小唄入2枚組)

(4)「耶馬渓巡り解説」(解説:森山芙美子･八坂寿美子，小唄:生駒静子，テイチク，0.80円，小唄入2枚組)

(5)「別府小唄」(作詞：不老暢人，作曲：権藤円立，編曲：服部良一，唄：大山利夫・繁代，タイヘイ［ママ］，0.80円，1枚物)

このうち,「地獄めぐり解説」(テイチク)については，1枚のみだが現物が確認できた。

レコード現物には，広告と若干異なる以下の記述がある。題名は

(6)「名勝解説　別府地獄巡り（小唄入り）(一)・(二)」

となっており，別府市観光課推薦・温泉課推薦とある。不老暢人作詩・村岡素芳作曲・阪東政一編曲とあり，解説の八坂が八阪，芙美子が富美子と異なっている。また，伴奏はテイチクオーケストラとあり，円盤中央穴の右に「6160/（3601)」，中央タイトル部の下に「3601」と表示されている。発行年・価格等は不詳である。

内容は以下の通りである。A面:「別府小唄」１番（作詞・作曲不詳/歌詞冒頭：別府湯の町，湯上り姿）→起点発車直前→温泉都市→亀の井前→乙原山→満鉄館→九州の宝塚→鶴見園前→御幸坂→焦熱地獄→音楽，B面：鳥の湯跡→温泉地帯→百景万勝→鉄輪温泉→海地獄→「別府小唄」2番（同A面)。南博責任編集（1988）所収の薬師寺知曨『地獄巡り解説』(改訂七版)（亀の井遊覧バス販売部，1936年）により確認したところ，文言の異同が見える。

この他，現物が確認できたものとして以下の1枚がある。

(7)「名所案内 大阿蘇登山案内解説 上り（上)・(下)」(作：薬師寺知曨（不老鴨［ママ］人)，勝信子，唄：玉木末香，帝国蓄音器株式会社（テイチクレコード)，価格不明，1枚物)
別府市観光課推薦・温泉課推薦とあり，円盤中央穴の右に「6233/（6449)」，中央タイトル部の下に「6449」と表示がある。

内容は以下の通りである。A面：(下山のことば）→大爆発→牛馬の放牧→千里が浜→「火の国小唄」→御野立所跡→新旧火口数，B面：小鳥と高山植物→大涅槃像→「火の国小唄」→阿蘇の人口→王者の観→坊中帰着。薬師寺（1933;1934[2]）により確認したところ，若干文言の異同はあるがほぼ同書に示された内容に一致している。

「別府から東京のスタジオまで吹き込みに行ったのは、村上あやめさんと芦邊静子さんだった。」[60]とする記事があることから，上掲以外のレコードもあったようである。この記事で紹介

59）東京都江戸東京博物館 編集（2005;155），企画集団ハヌマン 制作（2002:32）等にもレコードの写真が見える。
60）企画集団ハヌマン（2002:32-33）

された写真では，中央タイトル部の下には「3858-A」という表示があり，2人の名がある「別府温泉地獄巡り（上)」（ポリドール）いうレコードが写っているので，少なくともこれは上掲（1）のポリドール版地獄巡りとは異なる。

村上あやめ氏によれば，録音には「苦労しなかった」ということである。なお，村上綾子というのは，「（略）作者薬師寺知朧［ママ］さんが「あやめという名前はどうも良くないから、綾子にしたらどうか」と言い，レコードでは村上綾子になっている。当時は「子」がついた方が格式があったようだ。」というように村上あやめ氏のことである。（同記事参照）

なお，地獄巡りのレコードに基づいたCDが，亀の井バス創立70周年の記念事業の一環として，『別府七五調名勝解説－復刻版日本初のバスガイド』（TEICHIKU RECORDS，1999年，XL-70140）として市販されている。内容は，1.別府地獄めぐり，2.別府地獄めぐり（一）別府から八幡まで，3.別府地獄めぐり（二）八幡から海地獄まで，4.別府地獄めぐり（三）海地獄から血の池地獄まで，5.別府地獄めぐり（四）血の池地獄から別府まで，となっており，上掲（6）の「地獄めぐり解説」（テイチク）と聞き比べたところ，2･3トラックは同レコードに基づくものと思われる。

これらのほかに，解説を前面に押し出した絵葉書が制作・販売されるようにもなる。管見の限りでは，以下の3種が確認されている。

（1）「解説別府絵はがき　地獄めぐり八勝」（8枚組）別府亀の井自動車従業員共済会発行

（2）「阿蘇解説絵はがき」（16枚組）大阿蘇登山バス坊中事務所発行

（3）「池田湖巡り解説絵葉書」（16枚組）牧聞神社々務所発行

いずれも裏面には鳩の絵に「TAISHO」・「TRADE MARK」と配したロゴがあり，「Made in Wakayama」（すべて大文字の場合もあり），「Taisho Hato Brand」という社名等が見られる。

表面はいずれも名勝の写真に七五調の解説などが配され，各葉に「名勝を解説する女車掌」（「解説車掌」）と遊覧用のバス（自動車）の写真も示されている。

とりわけ，（3）については，池田湖巡りの冊子の現存が確認できない現状において，その解説の文言を知ることができるという点で重要である。

７．作詞活動

薬師寺は観光案内の解説のほか，多くの唄を作詞している。その多くは遊覧解説の中に取り込まれ，解説にメリハリをつけている。

管見の限りでは，以下の曲の作詞が判明している（［　］内は出典)。いずれも制作年や一部を除いてその曲調はわからない。

（1）「温泉情緒 別府小唄」（作詞：不老暢人，作曲：高千穂延男）［内田1934］

（2）「別府八景」（作歌：不老暢人，作曲：恒川時平）［内田1934］

（3）「別府三勝」（作：不老暢人）［内田1934］

(4)「別府郊外八湯」(作詞：不老暢人，作曲：恒川時平)［内田1934］

(5)「別府新音頭」(不老暢人)［高山1934］

(6)「別府四季」(作：不老暢人)［薬師寺1932］

(7)「別府八景 乙原小唄」(作者不記載)［高山1934］

(8)「鉄輪民謡 湯の里」(不老暢人)［内田1934］

(9)「地獄めぐり (亀の井遊覧バスの唄)」(「地獄めぐりの唄 (別府民謡・別府小唄の替唄)」)(不老暢人)［内田1934，薬師寺(初版刊年不記載);1935[6]］

(10)「日出小唄」(不老町人)［内田1934］

(11)「耶麻溪巡りの唄」(作歌:不老暢人，作曲:木野白情)［亀の井遊覧バス株式会社カ (不詳)］

(12)「世界の楽土 (亀の井ガレージの歌)」(作：不老町人)［薬師寺1929b］

(13)「志高小唄」［別府市役所1999第25回］

これらの歌の中でも，特に注目されるものは「別府小唄」(不老暢人 作・権藤円立[61] 曲) である。これは地獄巡りの解説の中にも取り込まれている。加えて，冊子に掲載されるなど広く知られていたことがうかがえるが，別府市で古くからあるCD店，土産物屋，NPO事務所などで40～70代位の店員・職員の方々に伺ったところ，「別府小唄」自体を知っているという回答は得られなかった[62]。前述のようにレコードは発売されていたようであるが，管見の限りでは音源が発見できず，曲調は不明である。

歌詞は次の通りである[63]。

一、歓迎　かもめ飛交ふ／砂場の沖に／ひゞく汽笛は／誰れ呼ぶ声ぞ／なびく湯烟ヤ／鶴見の裾野／あつい情けの／燃ゑるよに

二、景趣　鶴見枕に／速見が浦を／抱いて夢みる／姿のいとし／四季の風情は／湯靄に霞む／花に月雪／人に恋

三、温泉　出湯渦巻キヤ／湯烟ヤ踊る／桜紅葉の／里にも野にも／湯の香仄々／身も仄々と／ほんに湯の国／湯の世界

四、情調　お湯に暖りて／情けに酔ゑば／月もおぼろに／更け行く灯影／今宵別れて／いつ又逢へる／浮名流れリヤ／流れ川

五、留別　夢か寝ざめの／一と村雨に／またの逢瀬を／契るもうつゝ／留めて留らぬ／出船のどらに／名残紐ひく／海と陸

同書の51頁等では，「鶴見まくらに、速見が浦を／だいて夢みる(ササ)姿のいとし／四季の風情は、湯靄に霞む／花に月雪(トコ・サイサイ)[64]人に恋」とあり，「ササ」・「トコ・サイサイ」というはやしことばが挿入されたと見られる。

61) 内田 編輯 (1934) には「温泉情緒 別府小唄」として，作曲が高千穂延男となっているものが収録されている。ここでは2.の歌詞の速見が浦が菡萏湾となっている。
62) 2010年9月17日に実地調査を行った。
63) 薬師寺 (初版刊年不記載;1936[7]:119)
64) 最後の「サイ」は縦書で「く」をのばしたような繰り返し記号。

この歌詞からは，朝鮮を想起させるものはまったく感じられず，在韓時代の薬師寺の姿は想像しがたい。

なお，「別府小唄」には数種あり，内田 編輯（1934）には上記の外，「選者 西條八十，作曲 中山晋平」・「別府検　ゑみ作歌作曲」の2曲が収録されている。また，レコード「名勝解説 別府地獄巡り（小唄入り）（一）・（二）」所収の歌も「別府小唄」であるようだ。作詞・作曲は不詳だが，同レコードに収録されていることから薬師寺による詞の可能性が高い。

８．現代に生きる薬師寺の遺産

1872（明治5）年生れの薬師寺の活動は，おそらく20世紀半ば頃，終わりを迎えたとみて差し障りないだろう。ところが，当時薬師寺が残した遺産はそのまま，あるいは形を変え現在にまで受け継がれている。

第1に地獄巡りの案内解説である。2時間余のコース中，現在では2箇所ほどのみ七五調で紹介が行れており，南 編集（1988:458）所収の1936年の『地獄巡り解説』の文言と比較したところ，冒頭の流川通りの部分は「こゝは名高い流川、情のあつい湯の町の、メーンストリートの大通り、旅館商店軒ならび、夜は不夜城でムいます。」というようにそのまま用いられていた[65]。

第2に上述のCDにより，当時の案内がそのまま現在に蘇ったことが挙げられる。

第3に[66]2002年2･3月に熊八をモデルにし，主人公を中村勘九郎（当時）が演じた『別府温泉 狂騒曲　喜劇地獄めぐり』（制作：松竹株式会社，作：金子成人）が東京・新橋演舞場と大阪・松竹座で公演されたことがある。これは中村勘九郎が地獄巡りのレコードを聴いたことが発端になったという。

９．おわりに

以上で見たように，薬師寺知曨は波乱万丈の人生を送った人物である。本論文の冒頭に述べたように，ジャーナリストとして，教育者として，朝鮮語文法書の著者として，地獄めぐりの七五調考案者として，それぞれの分野でそれぞれに注目されてきた人物である。しかし，1人の人物をその生涯の一部である各分野での活動のみをもってして評価することはできない。本論文では，まず薬師寺の人生の全体像を可能な限り描き出した。また，そこでは宇和島コネクションとでも呼べるものによって生涯を歩んだことが明らかになった。そして別府に引揚げてからは，朝鮮についての言及は勿論，朝鮮との関係をほのめかす言動すら管見の限りでは見られなかった。薬師寺は学びの基礎を国内で終えた後，おそらく宇和島コネクションとでも呼べる人脈によって朝鮮に渡り，その文才を生かして，新聞記者となるも挫折し，教育に活路を見い出すもまたもや挫折し，実業界での飛翔を試みるが，群山での空白の20年の後，別府に新天

65） 2010年9月16日に実地調査を行い確認した。
66） 中谷（2002）・未署名（2006）

地を求めたものの，当初は鬱々とした文筆の日々を送っていた。ところが，地獄めぐりとの出会いによって，それまでとは一転し，「トコサイサイ」という明るいはやしことばの別府小唄に象徴されるように，生き生きとした姿に生まれ変わる。

別府に引揚げるまでの薬師寺は，大院君暗殺の嫌疑等，時に政治的動きも見せながら，朝鮮の消息を愛媛に発信し，朝鮮での教育に注力し，朝鮮語の文法書を著すなど朝鮮と深い繋がりを持つ人生を送っていた。しかし，別府時代からは，観光業という新たな活躍の場との出会いによってそれを断ち切った，あるいは朝鮮との関わりなしに生活できるようになったかのようにも見える。こうしてみると，薬師寺の朝鮮との関わりとは，いわば「飯のタネ」という側面があったと捉えることもあながち不可能とは言えない。

とりわけ朝鮮語教育史の観点から見る際，朝鮮語と薬師寺のつながりという切り口で薬師寺の全体像を把握・理解しようとしがちである。しかしながら，『文法註釈韓語研究法』を執筆していた人物も，地獄巡りの解説や「トコサイサイ」と小唄の歌詞を捻り出していた人物も同じ薬師寺知曨なのである。前者のみ，あるいは後者のみから得る印象・判断と両者を総合して得るそれとはいささか異なるものとなろう。ある人物の生涯を通してみて初めて，明らかになることもあるだろう。これはひとり薬師寺知曨についてだけではない。

参考文献

網中幸義（1935）『大別府人物史』温泉タイムス社

稲葉継雄（1985）「韓南学堂について－旧韓末「日語学校」の一事例－」『文藝言語研究　言語篇』10

上島敏昭（1988）「不老暢人『地獄巡り解説』」（解題），南博責任編集『近代庶民生活誌⑧遊戯・娯楽』三一書房

内田正美 編輯（1934）『別府詩歌集 附大分県名勝吟』金泉堂書店（発売）

小倉進平（1920）『朝鮮語学史』大阪屋号書店

梶井陟（1980;1984改訂）『朝鮮語を考える』龍溪書舎

亀の井遊覧バス株式会社カ（不詳）「耶麻溪めぐり」亀の井遊覧バス株式会社（パンフレット）

企画集団ハヌマン 制作（2002）『地獄のある都市（まち）－油屋熊八と別府観光・地獄巡り』社団法人別府市観光協会

［今日新聞］（2008）「懐かしの別府ものがたり」514・515，『今日新聞』2008年9月13・16日付

佐賀忠男（1984）「湯けむり太平記－油屋熊八物語」（54）～（63），『西日本新聞』（大分版），1984年4月20・24・25・26・28日付，5月2・3・5・8・9・11日付

桜井義之（1964）「朝鮮に於ける邦字新聞の発刊－青山好恵とその事業－」『明治と朝鮮』桜井義之先生還暦記念会

桜井義之（1974）「日本人の朝鮮語学研究（二）－明治期における業績の解題－」『韓』33，韓

国研究院（表紙）・図書文献センター（奥付）
桜井義之（1979）『朝鮮研究文献誌－明治・大正編－』龍溪書舎
高崎宗司（2002）『植民地朝鮮の日本人』岩波書店（新書）
高山虔三 編輯（1934）『あづさ』2，高山活版社（奥付）・大分あづさ会（表紙）
東亜文化研究所 編集（1988）『東亜同文会史』霞山会
東京都江戸東京博物館 編集（2005）『美しき日本－大正昭和の旅 展』東京都江戸東京博物館
中田孝之介（1905）『在韓人士名鑑』木浦新報社
中井錦城（1915）『朝鮮回顧録』糖業研究会出版部
中谷健太郎（2002）「別府温泉狂騒曲 「地獄のご見物、あそばしませ」」企画集団ハヌマン制作（2002）所収
中西利八（1936）『新日本人物体系 満洲篇・朝鮮篇・在支篇』東方経済学会出版部
二村一夫（2008）『労働は神聖なり、結合は勢力なり－高野房太郎とその時代』岩波書店
不老暢人（1936）「別府の昔と今」『モダン別府』1（1），モダン別府社（別府市立図書館蔵№.110797651）
別府市役所（1999）「先駆者に続こう 別府観光振興の父 油屋熊八」25～27,『市報べっぷ』1999年1～3月
三重野勝人（2004）「油屋熊八翁の実像を探る」『別府史談』18，別府史談会
未署名（2006）「別府八湯物語事始」『別府市観光読本其之壱2006』別府市観光協会
南博責任編集（1988）『近代庶民生活誌⑧遊戯・娯楽』三一書房
村上秀夫（1984）『小説 油屋熊八－アイディアに生きる－』別府市観光協会
村上秀夫（1998）『小説 油屋熊八－アイディアに生きる－パート2』別府市観光協会
森川芙蓉子（1933;1933[2]）『地獄めぐり 少女車掌車中物語（全文）』別府地獄巡り遊覧大橋バス発売
薬師寺知曨（1909）『文法註釈韓語研究法』盛文堂
薬師寺知曨カ（1935）「油屋熊八翁略歴」発行等不記載（大分県立図書館蔵№.00003629268）
＊薬師寺知曨による名勝案内解説冊子類については，表2を参照のこと。
Y校百年史編集委員会 編（1982）『Y校百年史』Y校百年史編集委員会
김동철 감수（2010）“국립중앙도서관 소장「1945년 이전 한국관련 자료」해제집”国립중앙도서관
하동호（1977）‘藥師寺知曨「韓語研究法」解說’“歴代韓國文法大系第2部第15冊”塔出版社

（ウェブ版著作物）

二村一夫（2005）『高野房太郎とその時代（二村一夫著作集第６巻）』（オンライン版書下ろし）'05.12.26完結とある。（二村一夫著作集 http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/nk/ に掲載。2010年9月14日最終接続）

＊本稿執筆に際して，以下の方・機関およびその職員の方々にはとりわけお世話になった。大阪大学総合図書館，大分県立図書館，別府市立図書館，愛媛県立図書館，成石久里氏　また，匿名の査読者2名からそれぞれ有益なコメントを賜り，それを反映させた個所がある。感謝いたします。

＜薬師寺知曨（不老町人・不老暢人）年譜＞

1872　伊予国宇和島に生れる(10.4)
(1月説もあり)
？　愛媛県立第三中学から平安義校(平安義黌)，同校卒業
？　末広鉄腸の門人となる
横浜商法学校速成科在籍カ
1894　**日清戦争開戦**(8月)
1895　仁川に渡航，朝鮮新報記者
日清戦争終結(4月)
1895　**閔妃殺害事件**(10.8)。大院君暗殺を窺うものと疑われるも(12月)，翌年3月に無関係とされる
1898カ　朝鮮新報退社
？　朝鮮開導論を発表
1898　江景で韓南学堂創設(10.7)
1900　別府を初訪問
1904　**日露戦争開戦**(2月)
1905　**日露戦争終結**(9月)
1905　**日韓保護条約**(11月)
1906　**統監府開設**(2月)
この頃，江景日本人会長
1909　『文法註釈韓語研究法』発行
(10.15)
1910頃　群山に転ずる
1910　**韓国併合**(8月)
1910　群山日報主催・日本観光団に同行
(5月カ)
この頃『実業之朝鮮』を主宰，群山印刷(株)
専務取締役，執筆活動
1919　**三一運動**(3.1)
1927　別府に転じ，「物書き」の真似ごとで日々を送る
1927末カ　地獄めぐりの解説を試作し，好評を博す。亀の井遊覧バス(株)常務取締役に就任
1928　『名勝解説地獄めぐり(別府案内)』発行(7.10)。以後，続刊。作詞も行う
1928　熊本放送局から地獄巡り全国放送
(12.5)
1929　日本ホテル協会のアメリカ視察(4月)
1932　ポリドールレコード吹込み(3月)
1934　タイヘイレコード吹込み(12月)
1935秋　油屋熊八翁銅像建設計画発起人
1940　『バス名勝解説原文増補耶馬渓巡り解説 全』(3版)発行(8.25)